

プラトン対話篇における登場人物としてのカルミデス ——『カルミデス』と『テアゲス』の比較——

田代 嶺

序

プラトンの対話篇には様々な人物が登場するが、その中には、ソクラテス以外にも、対話篇を跨いで登場する人物が存在する。著者不明の『プラトン哲学への序説』では、対話篇に登場する人物は対話の「質料に比される¹⁾」(ἀναλογεῖν τῇ ὕλη) とされていた。そうであるならば、対話篇に登場する人物は、場当たりの登場させられているのではなく、作者の明確な意図をもって登場させられていると見なすべきだろう。カルミデスは、複数の対話篇に登場する人物のひとりに数えられる。実際彼は、『プロタゴラス』(315A1)、『饗宴』(222B1)、『アクシオコス』(364A5)では名前が挙げられており、『テアゲス』(128E1-129A1)ではソクラテスと会話している姿が見られ、『カルミデス』では主要な登場人物となっている。このうち、『テアゲス』と『カルミデス』には、他の対話篇とは違う繋がりがある²⁾。まず二つの対話篇は、トラシュロスが編纂したプラトン全集の

1) Westerink (1990) p. 24 (5, 16, 8)

2) 一般に、『テアゲス』という対話篇は偽作と見なされているが、その判断ははまだ揺れ動いている。筆者は、少なくとも、『テアゲス』を「非プラトンの」と断定することはできないと考えている。詳細は田代(2020)を参照。

プラトン対話篇における登場人物としてのカルミデス（田代）

うち、同じ四部作集に入っている。また、プラトン対話篇の多くは古代から伝わる副題を持つが、『カルミデス』の副題とされる「思慮の健全さについて」は、『テアゲス』の副題としても伝わっている³⁾。さらに、『カルミデス』と『テアゲス』は構造としても対比できる。というのも、両対話篇は共に、ソクラテスに付き従った若者との対話を描いているからである。こうした複数の繋がりを持つ二つの対話篇に、同じカルミデスという人物が登場するのはなぜなのか。本稿では対話篇『カルミデス』と『テアゲス』を対比し、特に、『テアゲス』に登場する人物としてのカルミデスが、どのような意味を持っているのかを考察する。

1. 対話場面の比較と対話相手の条件

『カルミデス』と『テアゲス』の対比は、対話の始まり、つまり対話場面の設定から始めることができる。それぞれの対話場面の設定はどうなっているのか、確認していこう。

1-1. 『カルミデス』の対話場面の設定

『カルミデス』は、ソクラテスがポテイダイアの戦いから帰還し、バシレの神殿の正面にあるタウレアスの相撲場に帰ってきた所から始まる。帰還したソクラテスにカイレボンが駆け寄ってきて、ソクラテスに当地での戦いの激しさを聞く。ソクラテスはそれに答えつつ、自分が戦地に赴いている間の、アテナイでの哲学と青年たちについて質問し返す。ソクラテスのこの発言を受けて、対話に加わっていたクリティアスはカルミデスの存在を告げる。

3) ジョヤルによれば、ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシャ哲学者列伝』の写本のうち、BとW写本の主たる読みとして、この副題が与えられている。もっともジョヤルは、これは各作品の順番が連続していることに起因している「機械的な誤差」(mechanical error)として理解されるべきと考えているが、同時に、そのような副題の流入が起こった一連の流れは推測に留まるとも指摘している (Cf. Joyal (2000) p. 195)。

「美しい人々についてなら」と彼は言った。「ソクラテス、今すぐにお分かりになると、私は思います。というのは、あの入ってきた人たちは、現在最も美しいと思われる人の求愛者であり、その先行者なのですから。そしてまた当人も、多分、すでに近くにいるのだと思いますよ」

「で、誰なんだいそれは」とぼくは尋ねた。「そして誰の子かな」

「あなたはきっとご存じですよ」と彼は言った。「しかし、あなたが出征する前は、まだ成年ではありませんでした。カルミデスですよ。私たちの叔父、グラウコンの息子であり、私のいとこです」(Chrm. 154A3-B2)

『カルミデス』においてカルミデスの名前が挙がるのは、ここが最初である。そしてすでに、『カルミデス』における対話の特徴がここに表されている。その特徴とは、聴衆の多さである。カルミデスの周りには、彼の美しさに惹かれた求愛者が常に存在しているのである。この後、ソクラテスはクリティアスに、カルミデスを紹介するように頼む。そして、カルミデスがソクラテスのそばにやって来る場面で、再び聴衆の多さについての描写がなされるのであるが、それは執拗とも言えるほどに、強調されたものとなっている。

……、彼がやって来ると、多くの人を笑わせたのだ。それというのも、ぼくたち座っていた人々はみな、席を空けようと、本気で近くの人を押しやったのだよ、自分の横に彼を座らせるためにね。そうしてぼくたちは、両端の席の一人を立たせ、もう一人を横に投げ落とすにまで至ったのだ。……それでクリティアスがぼくを、薬について心得ている人だと説明したとき、彼は何とも言えぬ眼差しでぼくを見つめ、今にも何かを尋ねようとしていた。そして、相撲場にいたすべての人々はぼくたちを、完全にぐるりと取り囲んだのだ (Chrm. 155B9-D3)。

プラトン対話篇における登場人物としてのカルミデス（田代）

こうして、カルミデスとの対話の場が構成される。ソクラテスの発言によれば、相撲場にいたすべての人々がカルミデスとソクラテスを取り巻いている。しかもカルミデスにしてみれば、その取り巻きの多くは自分に好意を持っている人間たちである。このような状況の中で、ソクラテスとカルミデスの対話は開始される。

1-2. 『テアゲス』の対話場面の設定

以上のような『カルミデス』の対話場面に対して、『テアゲス』はどうか。『テアゲス』の対話場面の設定は、『カルミデス』とは対照的に、人の少ない所で始まる⁴⁾。対話の発端は、テアゲスの父であるデモドコスが、ソクラテスに出会ったことである。

デモドコス「ソクラテス、もしお暇があるのなら、私はあなたに内々にお話したいことがあったのです。いや、たとえ用事があったとしても、それが大いに重要なものでないのなら、やはり、私のために暇を作ってください」

ソクラテス「もちろん、私は暇ですし、何と言ってもとりわけあなたのためとあらば。さあ、あなたに話したいことがあるなら、どうぞ」

デモドコス「それなら道をそれて、解放の神ゼウスの柱廊へと引っ込みませんか」

ソクラテス「あなたにそう思われるのなら」(Thg. 121A1-8)

注目すべきは、デモドコスの「内々に話す」(ιδιολογήσασθαι)という言葉である。「内々に」とは、もちろん、秘密であることあるいは、人に聞か

4) ジョヤルは、『ソクラテスの弁明』(17C7-10、21E2-22E5)の記述にも拘わらず、ソクラテスの対話は、大抵の場合、アゴラの喧騒から外れた場所で行われていると指摘している(Cf. Joyal (2000) p. 201)。

れたくないということを意味しているであろう。そして、その申し出を承諾したソクラテスに、デモドコス「道をそれて」（ἐκποδόν）、「引っ込む」（ἀποχωρεῖν）ことを申し出ている。内々に話したいことがあり、その話をするために場所を変えるということは、二つのことを示唆している。一つは、二人が出会った場所は人が多い所であるということ、もう一つは、彼らがより人の少ない所へ移動したということである。ソクラテスとテアゲスの対話は、その移動した先で始まる。つまり二人の対話は、あまり人に聞かれることがないのである。こうして両者の対話は、聴衆の多さという点で対照的になっている。これは何を意味しているのだろうか。

1-3. 対話相手に求めるもの

対話に際して聴衆が多いということは、実は、ソクラテスが対話相手に求めていることに影響を与えている。しかし、ソクラテスが対話相手に求めていることとは、そもそも何であるか。それは『ゴルギアス』において明言されている。カリクレスとの対話が始まる際の言葉に注目しよう。

ソクラテス「というのはね、ぼくが思うに、魂とその生き方について正しいか否かを十分に探求しようとする人は、三つのものを持っていないといけないのだが、きみはその三つをすべて持っているのだ。すなわち、知識と好意と率直さ（παρρησίαν⁵⁾）だ」（*Grg.* 486E6-487A2）

ソクラテスはこれらの三つをカリクレスが備えていることに喜び、対話をそのまま続けてくれるように願う。前節で述べた聴衆の多さに影響を受けるのは、率直さである。なぜなら、多くの聴衆のなかで対話するというこ

5) *παρρησία* は「率直さ」（*outspokenness, frankness*）を意味し、アテナイ人にとっては、「言論の自由」（*freedom of speech*）を意味することもある。詳細はLSJの当該語を参照されたい。

とで、対話相手は自分が思っていることを話さずに、見栄を張って誇張して話したり、逆に、人の目を意識して言いたいことを言えなくなってしまうことがあるからである。実際、先の引用にあるソクラテスの言葉の前で、カリクレスは、ゴルギアス・ポロスとの対話におけるソクラテスを次のように非難していた。

カリクレス「……もし弁論術を学びたいと思っている人が、正しいことどもについての知識を持たずにゴルギアスさんの所へ訪れたとするのなら、ゴルギアスさんはその人にそれらを教えるかどうかと、あなたに尋ねられた時、ゴルギアスさんは恥ずかしがって、もし教えないと言うのなら、人々は不満になるだろうという、人々の感情のゆえに、教えると言ったのだ。……ところが、今は逆に、ポロス自身がそれと同じ羽目に陥った。……というのもポロスは、議論の中で、あなたによって両足を縛られ、轡をはめられてしまい、自分が思っていることを話すのを恥じたからなのだ」(Grg. 482C7-E2)

ゴルギアス・ポロスが遠慮したのは、それぞれの主張の本当のところを言ってしまうことに、負い目を感じていたからである。そして、負い目を感じさせる原因は、聴衆の存在であるだろう⁶⁾。

また、ソクラテス自身が直接的に聴衆の存在を気にかけている場面も、『プロタゴラス』に存在する。プロタゴラスとの対話が始まる前に、ソクラテスは次のように述べている。

6) 『ゴルギアス』(462E6-463A4)では、ソクラテス自身が聴衆の面前で話することを気にかけている。これは、ソクラテスは、自分の本心を言うのは構わないが、それによってゴルギアスを傷つける(=面子をつぶす)ことになることを危惧しているためである。

それでは、あなたが考えてください。これらのことについて、あなただけで私たちと話し合うべきか、それとも他の人と一緒であるべきか、どちらなのかを（*Prtg.* 316C2-4）。

プロタゴラスは多くの人の目に晒されながら、対話を始めることに同意する。ソクラテスは、そうした発言の裏にあるプロタゴラスの虚栄心を見抜きつつ、大勢の前で対話を開始する。そうして、多くの聴衆に見守られた対話は、失敗に終わる。プロタゴラスは対話に応じることを拒否し、ソクラテスはその場から立ち去ろうとしているからである（*Prtg.* 335A9-D1⁷⁾）。こうした対話の失敗の原因の一つは、聴衆の目に晒されているために、対話相手が自分の思っていることを素直に話すという、率直さを失ってしまっていることに帰されるだろう。このように、聴衆の多さとは、対話の成否に直接的に関わっているのである。

1-4. カルミデスの応答

聴衆の多さという観点から見れば、『カルミデス』での対話は別の様相を呈してくる。思慮の健全さを既に備えているのか、それとも、それに關してはまだ欠けるところがあるのかと、ソクラテスに問われたカルミデスは、次のように答えている。

「というのは、もし私が」と彼は言った。「一方で健全な思慮を持っていないと言うのならば、自分自身について、そのようなことを言うのは奇妙なことでしょうし、また、このクリティアスや、この人の言葉によると、私のことを健全な思慮の持ち主であると考えている多くの人々を、嘘つきだと証明することになるでしょう。また他方で、もし

7) その後、プロタゴラスとの対話は続けられることになるが、それは聴衆が（特にプロタゴラスに対して）無理やり続けさせた結果であるので、ソクラテスが望んで行った対話とは言えないであろう。

私がそのようなものを持っていると言い、自身を称賛するのならば、それは非常に不愉快なことだと思われるでしょう」(Chrm. 158D1-5)

カルミデスはここで、クリティアスと聴衆を明確に気に掛けた発言をしている。したがって、実際の対話が始まる前から、カルミデスは対話に必要な条件を欠いている可能性があるのである。しかし、『テアゲス』ではこのような描写は見られない。

もっとも、ソクラテスはカルミデスがこのように返答することも、仕方のないことだと見なしていたようである。だからこそ、先のカルミデスの言葉に対して、このように返答している。

「そして、ぼくには次のように思われるよ」とぼくは言った。「ぼくが尋ねていることを、きみが獲得しているのかいないのかということは、協力して考えるべきことなんだ。というのは、きみが言いたくもないことを、強制的に言わされたりしないためにね」(Chrm. 158D8-E2)

このようにソクラテスは、対話相手であるカルミデスが——聴衆がいようとも——自分の思ったことを言えないようなことがないようにと、配慮しているのである。これは、ソクラテスがカルミデスに寄せる期待と言えるかもしれない。しかし、ソクラテスのこの期待は裏切られることになる。この後の、実際の対話におけるカルミデスの振る舞いは、ソクラテスの対話相手足る条件を、明確に欠いているからである。次章ではその場面について議論していく。

2. テアゲスへのアイロニー、カルミデスへの叱責

前章では『カルミデス』と『テアゲス』の場面設定から、両対話篇の対話を分析した。本章では、実際の対話においてカルミデスとテアゲスに使

われた言葉に注目することで、両者の描かれ方にどのような違いがあるのかを見ていきたい。その際、ポイントとなるのは形容詞 $\mu\alpha\rho\acute{o}\varsigma$ である。この形容詞の元々の意味は、「血で汚れた」(stained with blood, defined with blood) であるが、転じて一般的に「穢れた」(defiled, polluted) という意味になり、さらには、道徳的に「嫌悪すべき」(abominable) や「無礼な」(foul) という意味を持つ。この語の男性・単数・呼格形 ($\mu\alpha\rho\acute{\epsilon}$) は、なだめるような意味で (in coaxing sense)、「ならず者」(you rogue) という意味を持つとされている⁸⁾。プラトンのものとされている対話篇で呼格形が使われているのは四例しかなく、対話篇の数で言えば三つである。用例のうちの一つは『カルミデス』内でカルミデスに使用されたものであり、もう一つは『テアゲス』内でテアゲスに使用されたものである⁹⁾。では、どのような場面で使用されているのか、実際に分析していこう。まずは、『テアゲス』である。

2-1. 『テアゲス』における $\mu\alpha\rho\acute{\epsilon}$ の使用

『テアゲス』においてこの語形が使用されるのは、ソクラテスとの対話を通じて、テアゲスの望みが「独裁支配と独裁僭主になること」だと明らかにになるときである。

ソクラテス「そうすると、そのポリスにいるすべての人を支配しようと望む者は皆、先ほどの人たちと同じ支配、つまり独裁支配を望み、独裁僭主足らんことを望んでいるのではないかね」

テアゲス「そのようです」

ソクラテス「それでは、きみはこのような支配を望むと言っているの

8) 以上、LSJの当該語を参照。

9) 残りの二つは、『カルミデス』(174B11)でクリティアスに使用されたものと、『パイドロス』(236E4)でパイドロスに使用されたものである。

かね」

テアゲス「私が答えてきたことからすると、どうやらそうらしいです」

ソクラテス「何ともひどい男だね (ὁ μαρῆ)、君は。となると、ぼくたちの独裁僭主となることを望みながら、きみはお父さんを以前から非難しているのかね、独裁僭主を養成する誰か先生の所へきみを遣ろうとしなかったから、と」
(*Thg.* 124E5-125A2)

一見すると、独裁僭主になろうとしていることを認めてしまったテアゲスに、ソクラテスが詰め寄っている場面に見える。だが、対話の冒頭で、デモドコスが述べていたテアゲスの望みは「知者になること」(σοφὸς γενέσθαι) (*Thg.* 121D1) であり、その望みそのものは「低俗なものではない」(*Thg.* 121C7) はずである。「知者になりたい」という望みをテアゲスは持っていたが、ソクラテスとの対話を通じて、その内実は「独裁僭主になりたい」ということだったということが、ここで暴露されているのである。もっとも、ここでの一連の対話は、テアゲスが自分の望みについてきちんと把握しておらず、その点を突かれて、ソクラテスにからかわれている可能性が高い。事実、この後の対話は、テアゲスに独裁僭主になろうとする望みを捨てさせるものとはなっていない。どのような人と交流を持てば、独裁僭主になることができるのかという議論になっている。その対話の終わりに、テアゲス自身がソクラテスに次のように告げている。

テアゲス「先ほどからソクラテス、あなたは私を茶化して、からかっていらっしゃる」(*Thg.* 125E4)。

このように、テアゲスはソクラテスの振る舞いを責めている。この事実に合わせてベイリーは、当該の呼格形が使われた会話において、ソクラテス

が本当に怒って自分を責めているわけではないことに、テアゲスは気づいていたと考えている¹⁰⁾。いずれにせよ、ここでソクラテスはテアゲスに対して、いわゆるアイロニーを用いているのであって、本気でテアゲスを叱っているのではない。またそれゆえに、**μαρπέ**の語も、強い非難のニュアンスを含んでいないと考えられるのである¹¹⁾。

2-2. 『カルミデス』における **μαρπέ** の使用

上記の『テアゲス』での使用法に対して、『カルミデス』ではどうか。端的に結論を述べてしまえば、カルミデスに対しては、このような解釈をすることはできないと思われる。その理由を、カルミデスに当該の言葉が使われるまでの対話の流れを追って説明していきたい。

まず注目したいのは、ソクラテスがカルミデスに対して、「カルミデスの思うところの思慮の健全さ」を尋ねている場面である。対話の始まりにて、ソクラテスはこのように述べている。

「言っておくれ」とぼくは言った。「きみの思わくでは (*κατὰ τὴν σὴν δόξαν*) 思慮の健全さとは何であると主張するのかを」(*Chrm.* 159A9-10)

ここでソクラテスは、思慮の健全さについて、カルミデスの自身の見解を尋ねている。実際、カルミデスはそこで悩みながらも、「一種のもの静かさ」(*Chrm.* 159B5) という定義を提出している。つまり、ソクラテスは

10) Cf. Bailly (2004) p. 169. 加えてベイリーは、「もしテアゲスが、ソクラテスは独裁僭主になることを欲している自分を真剣に叱っているのだと考えていたのなら、換言すれば、ソクラテスが何も楽しそうでないと考えていたなら、テアゲスはソクラテスに対話を続けさせていないであろう」(Ibid) と述べている。

11) 「[124e11-125b4]でのソクラテスの言葉は、アイロニカルなもの以外としては、ほとんど解釈され得ない」(Joyal (2000) p. 232) もっともジョヤルは、純粋なアイロニー以外の解釈をとっている、シュライアマハーの解釈も紹介している。この個所のこれまでの解釈については、Bailly (2004) p. 168f. を参照。

プラトン対話篇における登場人物としてのカルミデス（田代）

カルミデス自身の見解にこだわっているのである。だが、それも正当なことであろう。というのも、そもそもこの対話は、思慮の健全さがカルミデスに備わっているのかを見極めるために行われているからである。カルミデスに思慮の健全さが備わっているかどうかは、カルミデス自身の見解を聞くことでしか分からないであろう。

だが対話が進んだのち——その間カルミデスはソクラテスに論駁され続けているが——カルミデスはソクラテスに、次のように言う。

「というのは、今思い出したのです——以前に誰かが言っていたそれを聞いたのですが——つまり、思慮の健全さとは、自分のことをすることである、というものです。それでですね、このように述べた人が正しく述べていると、あなたに思われるかどうか、これを考察してください」(Chrm. 161B5-7)

自分からも明らかにしているが、ここでカルミデスは自分の見解を述べておらず、かつて自分が聞いたことのある見解を述べている。これに対するソクラテスの応答が、以下のものである。

そこでぼくは「呆れた奴め (ὄ μωρόν)」と言った。「このクリティアスか、あるいは、誰か他の知者のうちのひとりから、それを聞いたな」(Chrm. 161B8-C1)

ここまでの流れを見れば、ソクラテスがカルミデスに対してアイロニーを用いているとは考えられない。なぜなら、単にカルミデスはソクラテスとの同意をここで反古にしているだけだからである¹²⁾。したがって、ここ

12) この個所における μωρόν の訳に関して言えば、例えばムーア&レイモンドはLSJに記載されている通り「ならず者」(you rogue)と訳しており(Moore & Raymond (2019) p. 14)、ラムは「わんぱく小僧」(you rascal)と訳している(Lamb (1955) p. 35)。いずれ

でのソクラテスは「本当に」カルミデスを叱責しているのだと考えられる¹³⁾。そしてそうであるならば、この一連の応対から見えるのは、カルミデスの対話における不誠実さであるだろう。

以上のような読み筋に従えば、μιαρέ という語の使用は、テアゲスとカルミデスでは異なる意味を持っていると考えることができるだろう。テアゲスは、ソクラテスとの対話に真摯に——いくぶん稚拙なものであったかもしれないが——取り組み、その結果として、自分の望みの矛盾に気づいているのである。だが、カルミデスはソクラテスとの対話において、自身が反駁されるのに耐えられず、他者の見解に逃げたのである。ここには対話に参加するものとしての、誠実性の違いが表れていると考えられる。もちろんカルミデスの方が対話において不誠実である。そして、カルミデスの不誠実性は、この後のカルミデスの振る舞いから、さらに実証されていると考えられるのである。

3. カルミデスの「笑い」

本章では、『カルミデス』における振る舞いから、カルミデスの性格をさらに明らかにしていきたい。ポイントとなるのは、カルミデスからクリティアスに対話相手が代わる、まさにその場面でのカルミデスの振る舞いである。

ソクラテスは、思慮の健全さとは「自分のことをすること」だと提示する人間は、謎かけをしているのだとして、その定義には何か別の含意があることを指摘する。だが吟味を進めていっても、カルミデスは、やはりソ

にせよ、これらの訳は、ソクラテスが親しみを持ってカルミデスに應對している、という解釈に基づいたものだろう。本稿ではこの解釈を採用しない。

13) シュミットは「この定義に関して、ソクラテスは面白半分ではあるが (playfully)、カルミデスに対して怒っている」(Schmid (1998) p. 30) としつつ、「こうした応答こそが、ソクラテスを極めて激しく失望させたので、ソクラテスはカルミデスを「呆れた人」(wretch) と呼んだのだ」(Schmid (1998) p. 31) とし、ソクラテスのカルミデスに対する否定的な一面を読み込んでいる。

プラトン対話篇における登場人物としてのカルミデス（田代）

クラテスの質問に上手く答えられない。そこでカルミデスは、次のようにソクラテスに応答した。

「しかしひょっとしたら、そのように述べた人もまた、自分が何を意味しているか、まったく分かっていないのかもしれない」と、このようなことを言うとともに、ひっそりと笑いながら (ὕπεργέλα)、クリティアスの方に目を向けた (*Chrm.* 162B9–11)。

こうして、対話相手はカルミデスからクリティアスへと代わっていく。対話篇全体の転換点とも言えるこの個所には、様々な解釈が存在する。例えばムーア&レイモンドは、そもそもソクラテスは、カルミデスに当該の徳について思考させることが目的であったという可能性を示し、「カルミデスの魂への問いは、哲学の勧めとして機能していた (protreptic function)¹⁴⁾」と解釈している。また、徳の探求とは個人的な事柄ではなく、万人に関わることであるのだから (Cf. *Chrm.* 166D4–6)、ここでの対話相手の変更は然したる問題とはならず、仮に、「自分のことをすること」にカルミデスが失敗しているとすれば、それは「クリティアスの見解の吟味が始まった時ではなく、カルミデスが吟味を全くやめてしまったときである¹⁵⁾」とみなしている。したがって、この解釈に則れば、カルミデスが探求を止めた描写がないので、対話相手の変更、さらに言えば、自分自身の意見を表明しなかったことでさえも、大きな問題にはならないのである。

これに対してカークは、ソクラテスの対話相手の振る舞い方が、対話の全体像とその対話から利を得るその当人の能力を決定しているとみなしている¹⁶⁾。そして、ここでのカルミデスの描かれ方は、カルミデスにそう

14) Moore & Raymond (2019) p. 66.

15) Ibid, p. 68.

16) Kirk (2016) p. 315.

いった能力がないことを示しているとする¹⁷⁾。なぜならカルミデスは、ソクラテスの対話相手となって定義の説明をするという役目を、クリティアスに押し付けているからである（*Chrm.* 162C4-D2）。したがってこうした解釈に則れば、自分以上に当該の定義に対して詳しい人物に対話を譲る、というカルミデスの振る舞いは、表面上は紳士的なものと言えるかもしれないが、実際のところ「そのような振る舞い方によって、ソクラテスが始めようと望んでいた種類の変化の可能性は、損なわれているのだ¹⁸⁾」ということになる。

本稿ではこれまでの解釈から、カークの読み筋に従って、さらに解釈を展開したい¹⁹⁾。筆者は、カークのように、カルミデスがソクラテスの対話相手たる資格（＝能力）を欠いていることに加えて、カルミデスの対話に対する不誠実さが、ここに強く現れていると考えている。問題となるのはカルミデスの「笑い」の描写である。

先の引用（*Chrm.* 162B9-11）で、カルミデスはクリティアスに笑いかけていた。ここで使われているのは動詞 *ὑπογέλαω* の未完了過去、二人称、単数形（＝*ὑπέγελαι*）である。辞書的な意味は「小さく笑う、微笑む²⁰⁾」（*laugh a little, smile*）であるが、プラトンはこの場面以前にも、カルミデスを笑わせている。カルミデスがソクラテスの所にやってきた時、ソクラテスは、頭痛に効く薬と、その薬の効果を高める呪いの存在をカルミデスに告げる。呪いを書きとろうとしたカルミデスに、ソクラテスは言う。

17) Ibid, p. 316f.

18) Ibid, p. 317.

19) 仮にムーア & レイモンドの解釈が適切であるならば、第2章で述べた形容詞 *μικρός* の呼格形の使用が説明できず、さらに当該の箇所直後の 162C1-D2 に挿入されているソクラテスの回想が、どのような意味を持つかを説明できない、と筆者は考えている。対話相手に関係なく、思慮の健全さの意味を探究することが目的であるのなら、どのような理由でカルミデスがクリティアスに対話を譲ったのかを説明する場面は必要ないはずである。この点で、「カルミデスはソクラテスとの対話から逃れたかった」という、カークの解釈の方が整合的であると思われる。

20) LSJ の当該語を参照。

「どっちなのだ」とぼくは言った。「きみぼくを説得するのか、それともしないのか」。すると彼は笑って (γελάσας)、「あなたを説得するのなら、説得してですよ、ソクラテス」と言った (Chrm. 156A3-4)。

ここでは笑いを表現するのに、動詞 γελάω のアオリスト分詞 (γελάσας) が使われている²¹⁾。つまり、同じ人物の笑いの表現に対して、プラトンは異なる表現を使用しているのである。その理由は、二つの笑いにおけるニュアンスの違いを明確に示すことにあるのではないか。

二つの動詞は共に、動詞 γελάω を元にしてている。156A3-4 では、動詞 γελάω をそのまま変化させた形が用いられており、162B9-11 では、動詞 γελάω に前置詞の ὑπο が付けられた合成動詞が用いられている。したがって、ニュアンスが付加されているのは、ὑπογελάω の方である。合成動詞の前綴りとなった ὑπο は、動詞に様々な意味を付与するが、その中に「隠れて」(secretly) というものがある。これはさらに、「ごまかした、不正の」(underhand) という意味と擬えられる²²⁾。したがって、この個所でのカルミデスの「笑い」に、不誠実な点を見出すことは不可能ではない²³⁾。しかし、なぜここでカルミデスはこのように笑ったのか。自分が他人を吟味している際の若者の様子について、『ソクラテスの弁明』において、ソクラテスが次のように述べたことに注目したい。

これらのことに加えて、特に暇を持つ若者たちが自発的に私について来たのです。彼らは裕福な家の出ですが、人々が吟味されるのを聞き、喜んでました (Ap. 23C2-4)。

21) 同じくこの引用で使われている「説得する」(πειθεiv) という動詞に関しては、本稿の注 26 を参照。

22) Smyth 1956: p. 388. (§ 1698, 4)

23) 実際、ラムはこの個所を「悪賢い笑みを浮かべて」(gave a sly laugh) と訳しており、単なる微笑ではないことを示している (Cf. Lamb (1955) p. 41)。

若者たちは、ソクラテスに大人が吟味され、論駁されることを喜んでいたのである。この若者の特徴を思い起こせば、カルミデスの「笑い」は一層、不誠実なものであると考えられるだろう。なぜなら、先の引用（*Chrm.* 162B9-11）にあるように、カルミデスは自分に定義を教えた人間でさえも、満足に答えられないという宣言をした後に、クリティアスに「笑いながら」対話を譲渡しているからである。つまりここでのカルミデスは、クリティアスが論駁され、狼狽するのを楽しもうとしていると考えられるのである。それゆえにプラトンは、「笑い」の表現を意識的に変えていると考えられるのである。

4. 『テアゲス』におけるカルミデスの登場と対話の終わり

本章では、これまで『カルミデス』を通して考察してきたカルミデスが、なぜ『テアゲス』に登場しているのかを考察する。結論を端的に言うのなら、『テアゲス』に登場するカルミデスは、テアゲスとの対比を示すために、意図的に登場させられていると考えられるのである。まずは、『テアゲス』にカルミデスが登場する場面を見ておこう。ソクラテスが語るダイモニオンのエピソードの一節である。

ソクラテス「ある時カルミデスは、ネメア競技のために徒競走の練習をしようとしていたのですが、私に、助言を求めたのです。彼が「練習をするつもりです」と切り出すとすぐに、声が生じました。そして私は、彼を思い留ませようとして、こう言ったのです。「きみが話している間に、ダイモニオンからのあの声が私に生じたのだ。さあ、練習はやめにしなさい」と。彼は言いました。「おそらく、それはあなたに、私が勝利しないということを伝えたのでしょう。しかし、仮に私が勝利しないとしても、私がこの

時間を訓練に励むのなら、自分自身のためにはなるでしょう。彼はこのようなことを言って、練習しました。それでその練習の後に、彼に何が起こったのか、これは本人に聞いてみる価値があります」(Thg. 128E1-129A1)

このエピソードでは、カルミデスがどのような結果に陥ったのかは判然としない。しかし、このカルミデスは『カルミデス』での対話を経た後のカルミデスであることはまちがいない。『カルミデス』の最後で、カルミデスはソクラテスに教えを乞い、付き従うことを望んでいた。それにも拘わらず、ここではソクラテスの言うことを聞かず、自分の我を通してののである²⁴⁾。つまりカルミデスは、ソクラテスのことを自分よりも優れた人間であると見なしていたのにも拘わらず、それを蔑ろにしているのである²⁵⁾。だが、『カルミデス』の結末に鑑みれば、カルミデスには元々このように頑固で独善的な部分があったと言えるだろう。というのも、『カルミデス』の終結部、ソクラテスに付き従うことを決めたカルミデスは、ソクラテスを説得することなしに、強制的にソクラテスに付き従うことを決定しているからである。

「それなら、きみは強行するつもりかい」とぼくは言った。「ぼくに予審の機会を与えようともせず」

「強行するつもりですとも」と彼は言った (Chrm. 176C7-8)。

24) ムーア&レイモンドは、「カルミデスは練習に時間を割きすぎて、ソクラテスとの交流をやめてしまったか、あるいは、実際のところネメア競技祭で勝利して、図に乗った結果、ソクラテスとの交流をやめてしまったのかもしれない」などと推測している (Moore & Raymond (2019) p. xxvii, n. 48)。

25) これは『弁明』(29B6-7)における「他方で、不正を為すことや、より善き神や人間に従わないこと、これらのことが、悪しき恥ずべきこと (κακὸν καὶ αἰσχρὸν) であると、わたしは知っています」という台詞と符合するとも考えられる。自分より優れているソクラテスにカルミデスが従わないということは、カルミデスの自尊心の現れであり、哲学に従事し続けるソクラテスの徒でないことを表しているのではないだろうか。

このようにカルミデスは、ソクラテスを説得することなく²⁶⁾、ソクラテスに付き従うことを勝手に決めてしまっている²⁷⁾。

これに対して、テアゲスはどうか。テアゲスもカルミデスと同様に、対話の最後でソクラテスに付き従うことを決めている。だがその経緯は、カルミデスとは全く違うものである。ソクラテスの傍にいられるかどうかを、ダイモニオンが決めるというのならば、そのダイモニオンを試そう、とテアゲスは提案する (*Thg.* 131A1-7)。この申し出に、ソクラテスは次のように答えている。

ソクラテス「ええ、もしそうすべきだと思われるのであれば、私たちはそうすることにしましょう (ποιῶμεν)」 (*Thg.* 131A10)

ソクラテスの返答は現在、一人称、複数形であり、ソクラテスも含めたその場の人間が、ダイモニオンを試すということに同意していることを示している。つまりテアゲスは、カルミデスとは違い、ソクラテスの了承を得たうえで、付き従うことを決めているのである。

こうした読み筋に従えば、『テアゲス』にカルミデスが登場することの意味が鮮明になるであろう。すなわち『テアゲス』でのカルミデスは、哲学をせずに——あるいは中途半端に哲学をして——ソクラテスの許を去った、失敗例として描かれているのである。そして、そのカルミデスの登場が、逆説的に、テアゲスとソクラテスの対話が成功裏に終わり、テアゲス

26) この「説得することなく」という点は本稿3章で引用した『カルミデス』(156A3-4)の対話と対比されるであろう。そこでのカルミデスは、頭痛に効く呪いを、ソクラテスを説得して手に入れようとしていた。しかし対話の終わりでは、ソクラテスを説得することなく、付き従うことを勝手に決めていたのである。この点から、対話を通じて、カルミデスの本性が露わになっていると見なすことができるだろう。

27) ジョヤルは、「伝記的な説話一般の特徴として、先行する文学上の証拠 (literary evidence) に過度に依拠する、ということがある」(Joyal (2000) p. 268)として、この個所におけるカルミデスの振る舞いが、『テアゲス』でのカルミデスの振る舞いと連関していることを指摘している。

プラトン対話篇における登場人物としてのカルミデス（田代）

の魂が向け変わったことを示唆しているのである。実際テアゲスは、ソクラテスの徒として、二度言及されているのだ（*Ap.* 33E7-34A1, *R.* 496B7)²⁸。『テアゲス』におけるカルミデスの登場は、『カルミデス』と『テアゲス』の比較を促すための装置と考えられるのである。

結

本稿では『テアゲス』と『カルミデス』を比較し、『テアゲス』に登場するカルミデスが持つ意味を探ってきた。両対話篇は共に、ソクラテスに付き従う若者との最初の対話を描いている。しかしソクラテスに付き従った後にどのような生を送ったかという点で、両対話篇は対照的なことを示めているのである。『テアゲス』でのカルミデスの登場は、ソクラテスとの対話によってテアゲスの魂が向け変わったことを示唆しているのである。プラトンが——あるいはプラトン以外であっても——カルミデスという同一のキャラクターを登場させた意図はここにある。そうであるのなら、『テアゲス』と『カルミデス』は共に哲学の始まりを描いた作品と見なすことが可能であるし、特に『テアゲス』は哲学への転向を成功裏に描いた作品として、まさに「哲学の勧め」を描いた作品だと見なすこともできるのではないか²⁹。

〔凡例〕

プラトン対話篇からの引用に際しては、底本として基本的に以下のものを使用した。

28) このことに加えて、ムーア&レイモンドが指摘するように、カルミデスはある時点でソクラテスの許から去ったことはほぼ確実である（Moore & Raymond (2019) p. xxvii）。なぜなら『饗宴』(222B1)にて、アルキピアデスは、ソクラテスに袖にされた人物の一人として、カルミデスの名前を挙げているからである。

29) この推定は、『テアゲス』の本来の副題である「知恵について」あるいは「哲学について」とも合致すると思われる。また、2世紀に活動していたとされるプラトン主義者アルピノスは、その著書『プラトン序説——対話篇入門』の4章にて、哲学の学習を『テアゲス』から始めるべきとしていた人々がいたことを伝えている（Cf. 中畑（2008）p. 7）。

Burnet, J. (ed.) (1900-07: first published), *Platonis Opera*, I-V, Oxford Classical Texts, Oxford University Press.

ただし、『ソクラテスの弁明』については、

Duke, E. A. et al (eds.) (1995), *Platonis Opera*, I, Oxford Classical Texts, Oxford University Press.

『ゴルギアス』については、

Dodds, E. R. (1959, reprinted: 2002) *Plato Gorgias*, Clarendon Press.

を使用している。引用箇所を表示は、Liddell, H. G. & Scott, R. (1996) *Greek-English Lexicon*, Oxford University Press. (=LSJ) で使用されている略記記号を用いた。訳出に際しては、文献表に挙げた各種翻訳を参照した。

〔文献表〕

Baily, J. (2004), *The Socratic Theages*, George Olms.

Joyal, M. (2000), *The Platonic Theages*, Franz Steiner Verlag.

Moore, C. & Raymond, C. C. (tr.) (2019), *Plato Charmides*, Hackett.

Schmid, W. T. (1998), *Plato's Charmides and The Socratic Ideal of Rationality*, State University of New York.

Henderson, J. (ed.), Lamb, W. R. M. (tr.) (1927: revised and reprinted 1955), *Plato*, XII, Loeb Classical Library 201, Harvard University Press.

Kirk, G. (2016), "Self-Knowledge and Ignorance in Plato's *Charmides*", *Ancient Philosophy*, 36, Mathesis Publications, pp. 303-320.

Smyth, H. W. (revised by Messing, G. M.) (1956), *Greek Grammar*, Harvard University Press.

Westerink, L. G. (ed.) (1990), *Prolégomènes à la philosophie de Platon*, Paris.

北嶋美雪訳 (1975) 『テアゲス』プラトン全集 7 巻、岩波書店。

山野耕治訳 (1975) 『カルミデス』プラトン全集 7 巻、岩波書店。

納富信留訳 (2012) 『ソクラテスの弁明』、光文社。

加来彰俊訳 (1967、改版：2007) 『ゴルギアス』、岩波書店。

中澤務訳 (2010) 『プロタゴラス』、光文社。

アルビノス『プラトン序説——対話篇入門』鎌田雅年訳、中畑正志編 (2008) 『プラトン哲学入門』京都大学学術出版会。

田代嶺 (2020) 『『テアゲス』と『テアイテトス』』、学習院大学哲学会編『哲学会誌』(44号)、pp. 1-21.